

「ポレポレファーム」

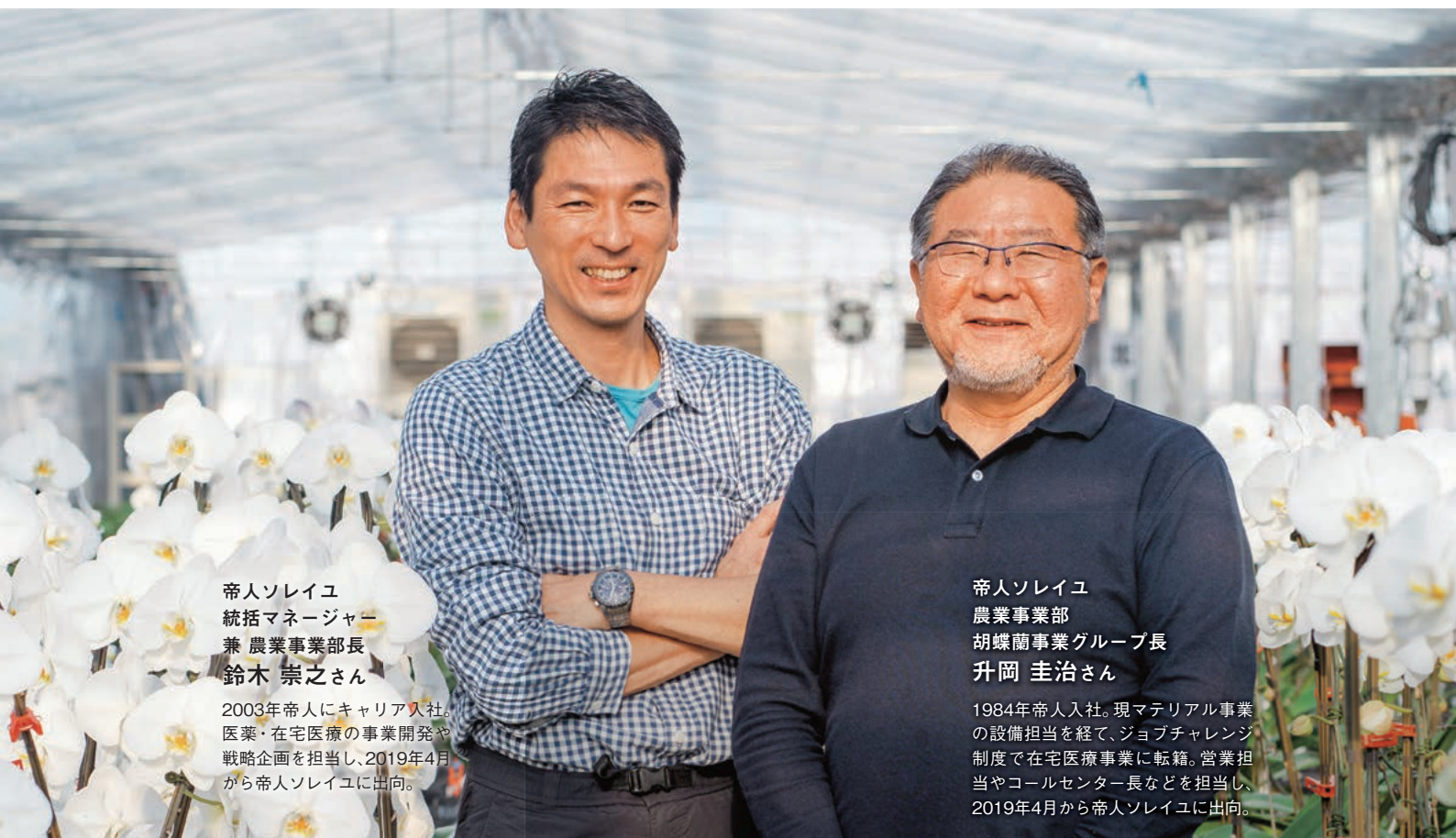
千葉県我孫子市、JR新木駅から徒歩8分の住宅街にある、帝人ソレイユのポレポレファームを訪ねた。畑とビニールハウスで、年間100種類にもおよぶオーガニック野菜や食用バラ、胡蝶蘭を栽培している。知的障がい、精神障がいのある10人のメンバーが、近隣農家のサポートを得ながら、フルタイムで畑や農作物の手入れ、収穫、出荷準備に携わっている。この日は、収穫したネギの泥を洗い落とし、3本ずつ丁寧にフィルムで包装する作業中。1日に200パックを出荷し、他の野菜と合わせて「旬のおまかせ野菜セット」として宅配されるほか、一部は一般の流通に乗って、スーパーマーケットにも並ぶ。

帝人グループの特例子会社（※）である帝人ソレイユは、事業の柱としてオフィスサポート（事務補助など）と農業を掲げている。障がい者福祉と農業を組み合わせた「農福連携」は、障がい者の就労や生きがいづくりの場を生み出すだけでなく、担い手不足や高齢化が進む農業分野で新たな働き手の確保につながることから、近年注目が集まっている。「これまで障がいのある方が働いていた生産工場が海外に移転したり、オフィス環境に馴染み

人と人の出会いから生まれる「化学反応」の物語。

Human : Chemistry

今回は「農福連携」を通じて障がい者の雇用と自立を支援する皆さんにフォーカスします。



帝人ソレイユ
統括マネージャー
兼 農業事業部長
鈴木 崇之さん

2003年帝人にキャリア入社。医療・在宅医療の事業開発や戦略企画を担当し、2019年4月から帝人ソレイユに出向。

帝人ソレイユ
農業事業部
胡蝶蘭事業グループ長
升岡 圭治さん

1984年帝人入社。現マテリアル事業の設備担当を経て、ジョブチャレンジ制度で在宅医療事業に転籍。営業担当やコールセンター長などを担当し、2019年4月から帝人ソレイユに出向。

にくい障がい特性をもった方もいる中で、農業分野には働く場として大きな可能性があります」と事業を統括する鈴木さんは話す。

※特例子会社…

企業が障がい者雇用を目的に設立する子会社。親会社が、障がい者の雇用に特別な配慮をした子会社を設立した場合、一定の要件を満たし、厚生労働大臣の認定を受けることで、親会社と合わせて障がい者の雇用率を算定することができる。

特例子会社設立へ

「特例子会社を作って農業をやりたいんだけど、一緒にやらない?」。2017年1月、ヘルスケア事業の同じフロアで働く鈴木さんと黒木忠さん（現・帝人ファーマリハビリ事業推進班）が、升岡さんにかけて一言が始まりだった。うつ病で休業中に触れた家庭菜園で、農業の癒しを実感し、本気で就農を考えたい鈴木さんと、障がいのある我が子の将来を案じる黒木さんと升岡さん。3人の情熱をエンジンに、本業を抱えながらの特例子会社設立に向けた活動がスタートした。

「実は帝人グループにとっても、障がい者雇用は対応を迫られる課題になっていました」と升岡さんは言う。国は障がい者の法定雇用率（2.2%、2021年3月から2.3%）を定めている。達成できなければ社名が公表され、企業イメージが低下する。しかし、雇用の中心である身体障がい者は売り

手市場で新規採用が難しく、一方で、知的障がい者、精神障がい者の雇用は受け入れる現場の体制が整っていない。「特例子会社に集約すれば雇用しやすくなる、そんな思いは前からありましたが、自分が提案を通せるとは思っていませんでした。事業企画の経験が豊富な鈴木さんと一緒だからこそできたんです」(升岡さん)。

役員への提案、事業計画の策定、社内調整、必要な資格の取得、新会社立ち上げへのハードルをいくつも乗り越えて、2019年2月に帝人ソレイユが誕生した。「社内でご理解、ご協力をいただいた皆さんはもちろん、私が学んだ社会人向けの農業学校で知り合った方々や、『福祉の我孫子』と言われるほど理解のある行政など、さまざまなか縁でここまで来ることができました」と鈴木さんは顔をほころばせる。

黒字化で従業員に誇りとやりがい

現在の課題は事業の黒字化だ。雇用率を維持・達成することに加え、いづれ会社として収益を問われるのは必然である。「もう一つ大きいのが従業員の働きがいです。黒字化してこそ誇りをもって働ける。だから収益には徹底的にこだわります」(升岡さん)。切り

障がい者雇用×農業のコラボが拓く新たな地平線

外から見た帝人ソレイユ



NPO法人 AlonAlon
理事長
那部 智史さん(左)

鈴木さんから、Facebookに突然見学希望のメッセージが送られてきたのが出会いの始まり。当法人が運営する胡蝶蘭農園「オーキッドガーデン」を熱心に見学されたことを記憶しています。鈴木さん・升岡さんは私の「同志」です。自宅に黒木さんを交えた三人を招き、酒を酌み交わし、夜通し語り合ったことは忘れられない思い出です。そんな関わり方ができたことが、私の大きな財産になっています。

大企業が動かなければ日本は変わりません(それは障がい者雇用を含めて全てに共通していることです)。多くの大企業が農福連携に投資することで、知的障がい者と精神障がい者の就労環境は飛躍的に改善すると考えています。

日本の農業は高齢化により衰退の一途をたどっています。私は農福連携が日本の農業を救うと信じて疑いません。帝人ソレイユさんには、日本の障がい者の就労環境の改善だけでなく、日本の農業を救う第一歩として、農福連携のモデルケースになっていたきたいと考えています。AlonAlonも全力で協力していきます。



1 胡蝶蘭の仕立ての様子 2 鉢ごとに貼るタグを作成 3 障がいの有無を問わない作業しやすい環境 4 合わせて1haの広さがある畑(サツマイモ収穫中) 5 旬のおまかせ宅配野菜セットは「美味しい!」と大好評 6 レストランやケーキ店への販売を目指す食用バラ

札は、障がい者の自立を支援する千葉県富津市のNPO法人 AlonAlonの取り組みから示唆を得て、昨年10月から出荷が始まった胡蝶蘭。台湾から仕入れた苗を6カ月育てて出荷する。1鉢の価格は3万円程度と高額で利益も大きい。仕事を通じて得た知り合いなど、様々なルートを通じて販販を進めている。「昨年、我孫子農場に来ていただいた鈴木CEOにも、トップセールスをしていただいています(笑)」(鈴木さん)。

販売目標は年間1万2000本、4000鉢だ。「そこまで売れば雇用する人数も増やし、黒字化も実現できます。取り組みが広く知られることで、世の中を変えていくこともできます」と鈴木さんは夢を語る。「実現のためには、グループの皆さんの協力が不可欠です。ぜひ一度、我孫子まで足を運んでいただければと思います。来て、見て、知っていただくことが私たちの力になります」。

メンバーの思いは形になった。今、さらなる可能性を広げるために、鈴木さんたちの挑戦は続いていく。